

「胎内から天国まで」の神

(イザヤ四六・一〜八)

「ゆりかごから墓場まで」これは第二次世界大戦後の英国労働党が掲げた社会福祉政策のスローガンである。

この旗のもと、英国は確かに世界有数の福祉大国になった。だがその財政支出は莫大であり、同時期に労働党が推し進めた国有化政策によって産業の国際競争力が低下したこともあいまって同国に重篤な経済の停滞をもたらした。いわゆる「英国病」である。そこから立ち直るために鉄の女、サッチャー首相による大改革が行われたのは記憶に新しい。時にわが国でもこのスローガンを借りていろいろな福祉政策を打ち出してきたが、ここにきて保育園の不足や、高齢者の貧困問題がクローズアップされている現状はなんともお寒い。高齢者の四分の一が貧困状態、待機児童は全国で四万五千人余りに上るというのだ（昨年十月厚生省調べ）。本当に大変な時代である。

閑話休題。今朝の聖句は第一義的にはバビロン捕囚期のイスラエルに向けて書かれたメッセージであるがそこに見られる神の姿は人間、殊に高齢者にとって大きな慰めと励ましを与えるものである。以下二つのポイントから読み解いていきたい。

一・見える神、偶像の虚しさ

一節にある「ベル」と「ネボ」はイスラエルが捕らえられたバビロン人が礼拝していた偶像の神であり、ベルは主神マルドゥクを指し、四つの目と四つの耳を持ち、何事をも見逃さず、聞き逃さないと考えられていた。対してネボには告知者という意味があり、主神マルドゥクの息子であり、知恵と書記の神として人類の運命をつかさどる神と言われている。しかしどんなに偉大な神と言っても彼らは人間が刻んだ像に過ぎないと預言者は言う。彼は又は風刺する。「どんなにそれらを神と呼び、崇め奉ったところで、それらは所詮獣や家畜に載せられて運ばれる荷物ではないか」と。それだけではない。見方を変えれば神殿に向けて練り歩く偶像の神の行列はそれらが人間がこしらえた「モノ」に過ぎないことを如実に表しているという。こうした偶像に対する批判は四四章あたりにも見られ、同じく皮肉に満ちている。どんなに精緻に作られた木彫の神像も元をただせばただの材木。「私を救ってください」と拝む偶像と同じ木を燃やして人は暖を取りパンを焼く。何と滑稽なことかと預言者は言うのだ。よしベルの像に四つの目と耳があらうと、観音様に千本の手があらうと、畢竟それは単なるお飾りに過ぎない。だから偶像を拝むことは全くもってむなしいのである。

二・見えない神、主の責任意識

こうしてイスラエルが陥っていた偶像崇拜の愚かさを皮肉つたのち、預言者は自らを神のごとくにして語る（三〜八節）。そこで語られているのは衝撃的な事実である。神の民はすべて胎内にいる時から主によって知られており、その人生は主のみ手によって運ばれているというのだ。『ピーナッツ』のライナス君ではないが人間はとかく自由に憧れ、独立した存在だと言いたがるものだが、よくよく考えると全くの「自立」は不可能である。すべてのかかわりを遮断し、全くの孤独の中で人は生きていけない。しかしたとえ虜囚の辱めのただ中に居り、孤立無援の中で過ごしていたとしても、神は共におられ、人間を運んでおられるというのである。

更に驚くべきことはその神のケアは人が年を取ってからも変わらなないということである。あまり知られていないことだがあのナチスは健康第一主義であり、がんの集団検診などをいち早く取り入れた国であったそうだ。だがその背後には健康な労働者をできるだけ多く確保し、役に立たなくなる時間をできるだけ減らそうとする恐ろしい合理主義、優性主義があった。要は役立たないものは背負わないということだ。しかし聖書の神は違う。年をとっても、白髪になっても、どうなっても神は変わらずその人を

背負い、救い出すというのである。よって神の愛は取引とは無縁である。神の愛はひたすらなる意志とそれを実現する神ご自身の力なのであり、人はその神に支えられているのである。

* * *

「あいの実」の会議の席上、相模原で起こった殺人事件に伴う保安強化の件が話し合われた。子どもの安全を確保することは確かに喫緊の課題である。だが宗教者としてはこの問題の根源にある、ゆがんだ優性主義に目を留めずにはいられない。それは唾棄すべき悪だ。だが私たちの社会の中にはこうした風が常に吹き荒れている。「使える」「使えない」「できる」「できない」で人を選別することが実に多く、その中で「自分は不要品ではないか」という思いに苛まれている人も大勢いる。しかし恵みの主は言われる。「しっかりとせよ」と（八節）。この動詞は旧約中一回だけ出現する語であり、語形的には「漢（！）であれ」という意味だそうである。若くても、老いても関係ない。強固な意志にして具体的な行動である神の力と愛を体験するならば人は誰でも真の強さを持つことが出来るのだ。まことに私たちの神は胎内から天国までの神。この神に運んでいただける幸いに感謝しようじゃないか。主のみ名はほむべきかな。アーメン。